

お元気ですか

発行所・(福)横浜市社会福祉協議会
障害者支援センター

〒231 横浜市中区桜木町1丁目1番地
-8482 横浜市健康福祉総合センター9階
TEL 045(681)1211・FAX 045(680)1550
<http://www.yokohamashakyo.jp/siencenter/>

編集発行人・内嶋 順一

2021 / 12

風を起こす

パラリンピック開会式への参加

片翼の小さな飛行機が、仲間たちの力を借りて飛び立つ。

八月二十四日、国立競技場で開かれた東京パラリンピック開会式でのシーン。その舞台となった「パラ・エアポート」の中心で懸命に風を起こす役の一人に高島尚義さんがいた。

.....

高島尚義さんは、東京の特例子会社で働く社会人二年生。三歳から港北区の地域訓練会「あおぞら会」に所属し、保育や体操、プールの活動に参加してきた。今も会の仲間と出かけた後、悩みを話したり、よい関係が続いている。

幼少期から、訓練会のイベントで踊ったりすることが大好きだった尚義さんは、高校一年生の時に認定NPO法人

スローレーベルに出会い、現代アートの国際展「ヨコハマ・パトラトリエンナーレ」に出演した。それ以来、バフオーマーの二員として活動している。そして今回、開会式への参加が決まった。

達成感

「序盤の大事な役、本当に風を起こすつもりで一生懸命演じた。たくさんさんの練習をしたので、緊張せずに楽しめた。本番を終えての感想は、疲れた。終わった。花火がきれいだったな...」そんな尚義さんの言葉から、炎天下の練習場、朝から夜までの長い練習時間、いつ出る番になるかわからないリハーサル待機時間など、過酷だった状況を乗り越えた達成感が伝わる。

母の思い

「練習の時間や場所も日々不確定な中、コロナ感染予防に注意を払い、親子で精神的にギリギリしている時期もあった。本当によく乗り越えてくれ、またひとつ成長したと思う」と、全練習に同行した母の聡子さんは語る。

育ちが気になっていた時、「よかつたら、おうちでの様子を見せて」と気持ちに寄り添ってくれた保健師さんがいた。訓練会を紹介してくれたその保健師さんに会っていなかったら、人生は変わっていた。訓練会では本音を言える自分の居場所であり、多くの仲間を作った子ども達の居場所。親子のスタート地点。訓練会時代の協力者やコーチからの「失敗して



本番前リハーサル控え室で(右が尚義さん)

もいいんだよ」との言葉に、本人も親も安心でき、前を向けた。順風満帆な子育てとも言えない切れないが、恵まれた環境だったと振り返る。

今回、開会式への参加を母として後押ししたのも、子育て中のそんな経験があったから。挑戦し、努力している本人の姿を見てくれた人の心に、少しでも響くものがあれば...と応援した。

尚義さんは、そんな母の思いも受け、開会式という大舞台で堂々と演技切り、風を起こした。

望遠鏡

私は発達障害を抱え、就学・就労困難な生活を送ってきた。自助グループ的な横浜ピアスタッフ協会(以下YPS)は、二〇一五年に発足した。発足当初から、私はYPSに関わり、その後も精神保健福祉士取得を含む研鑽を積んできた。永年失業者だった私はこの度依頼を受け、各地からの視野に入る「望遠鏡」の設置場所に身を置けたことに、感慨を覚える。YPSでは、当事者としての手記の執筆、プレゼンの他、支援者の養成等も行っている。作業療法士取得予定者に参加をお勧めしたい企画もある。コロナ禍で多数の方がうつ病に陥っているが、YPSにはうつ病を含む気分障害の経験者も多いので、お越しになられれば多くの克服事例を目にすることができるよう。

(横浜)ピアスタッフ協会

山田 潤

まち美化戦隊ゴミコロレンジャー

磯子区障害者地域活動ホームで、「ゴミコロリ」という地域清掃活動を行っている。「ゴミコロレンジャー」が、近隣のゴミ拾いをするという取り組みだ。

ゴミコロレンジャー

参上！

「ゴミコロリ」は、毎回十名前後のメンバーさんで行い、参加するかどうかは、当日メンバーさん自身で決めているという。ゴミコロレンジャーのカラーは団体で異なり、磯子活動ホームは明るい人が多いことから、黄色に決めている。そのため、黄色の衣装やTシャツを着用して活動している。

トンクとゴミ袋を持って手際よくゴミを拾っていく人、大きいゴミ箱を台車で押す人、皆と一緒に行くことを楽しむ人と、参加の仕方はそれぞれだ。皆で会話を楽しみながらにこやかに取り組

み、通りがかる地域の方に明るく挨拶をしていく。近所の工場の前を通ると、働いている方と慣れた様子で挨拶し手を振り合っていた。また、散歩中の保育園の子どもたちが「ゴミイエロー」を見て、歓声を挙げていた。

ひとりのメンバーさんが、「タバコがよく落ちているんだ」と教えてく



ゴミイエロー

れた。交通量の多い道路沿いであるためか、ゴミがたくさん落ちていた。植え込みの中まで確認して丁寧に拾い、最終的には四十五個のゴミ袋三つ分程まで集まった。

ゴミコロリとは？

元々は、アーティストのcocoが沖縄で行った「ゴミゼロ大作戦」に触発されて京都府の事

業所で始まった取り組みが、全国的に広がったもの。現在は、海外を含め二十八支部あり、磯子活動ホームは横浜支部を担っている。



お揃いのTシャツで



私たちにできること

下請けの作業量が減少した時期、メンバーさんの活動として何かできることはないか、と職員さん達が模索している中で「ゴミコロリ」を知ったという。今では、月二回程度実施し、地域の方や商店街の方が「ゴミコロレンジャー」を見かけると、笑顔で「ありがとう」「いっくろうさま」と声を掛けられる。

職員の八巻さんは、「地域の方々に感謝される、また、顔の見える関係を築くきっかけとなっている。これからもメンバーさんの魅力を引き出して伝えていきたい。」と話す。

フェイスブック等のSNSで活動の様子を積極的に発信してきたことで、他団体の方や地域の方から連絡があり、一緒に活動することもある。また、SNSで様々な情報が入ってくるため、新たな取り組みへ向かう刺激にもなっている。

今後は、ゴミから新たな製品を作る「アップサイクル」にも挑戦したいと先を見据える。さらなる発展に期待したい。

Facebook



一人ひとりの個性が光る作品を〜ぬり絵を通して〜

戸塚区にある「横浜YMCAワークサポートセンターレザン」は、自主製品として利用者が色鉛筆で塗ったイラスト入りの商品販売している。今回はそんなレザンでぬり絵を教える、山川ゆかりさんにお話を伺った。

山川さんは月三回レザンを訪れている。活動を始めたのは今年の六月。きっかけは近隣に住む職員の中村さんからのお誘いだ。大学では日本画を学び、誰かにぬり絵を教えたことはなかったという山川さん。初めてレザンを訪れた時は、利用者の方に理解してもらえないように伝えられるか不安もあった。

イラストは下絵から手掛けており、スタンドグラスのようにいくつもの形で構成するように描いている。一枚の葉は小さな四角で形作られ、そ

の枠の二つにカラフルな色を置いていく。教える中で難しかったのは、普段は自分の感覚で行う配色の選び方を言葉で伝えること。色の区別が難しい方のために、見本絵に言葉で色の解説をつけるなど試行錯誤した。今では自分で配色をする利用者もおり、回を重ねるごとに上達していく様子を見て、やりがいと感動を覚えるとのこと。また、活動を通して自分の絵を意識することで初めて見えるものもあり、教えられることもある。

それぞれの個性を大切にしたいと語る山川さん。利用者が自分らしく、そして誰もが見やすい作品になるよう、ぬり絵を教えていきたいと優しい笑顔でお話して下さった。



ぬり絵を教える山川さん(画面上)

障害者後見的支援制度 あんしんサポーター活動を振り返る

パートⅡ

後見的支援室のスタッフとして、定期的に登録者やその家族と後見的支援室（以下「支援室」）でお会いしたり、登録者の日中活動や暮らしの場などにも訪問するあんしんサポーター（以下「サポーター」）。

程よい距離感とは

山下さんは「障がい者後見的支援室ほどがやゆめあん」で働き始め七年目を迎えた。

落ち込んだ表情で来

登録者に対する理解を深め、将来の暮らしを一緒に考えていくために、登録者とかかわり方を模索しながら活動している。サポーター活動の更なる充実を目指し、六月に開催した報告会

所した登録者が、話を聞いて晴れやかな表情に変わったときは嬉しくて、心の中でガッツポーズをしたこともあった。一方、親しげな声かけが登録者の気分を悪くしてしまったり、話に相槌を打っ

想像力をフル稼働

「さぼーと・なみ（南

区）の山下さんは、この制度が始まった平成二十二年に開所したばかりの支援室で働き始め、十二年が過ぎた。この間、登録者やその家族、支援者など、多くの方たちに出会った。また、登録者だけではなく、きょうだいの結婚や家族の病気といった変化なども見守り、その時々、彼らの想いを受け止めてきた。

山崎さんは「自分以外の人間にはなれないが、登録者のことを知り、自分の経験や知識を総動員して、自分が登録者だったら…と想像すること、より登録者の側に

これから

登録者に寄り添い続けるサポーター。登録者が住み慣れた地域で安心して生き生きと暮らすことができるよう、その活動は続いていく。

報告会でお話いただいた あんしんサポーターのみなさん

つづき障害者後見的支援センター
リリーフ・ネット 高山 悠紀氏（*）
栄区後見的支援室とんぼ 石井 綾氏（*）
磯子区障害者後見的支援室
コネクト・ハート 原 美樹子氏（*）
中区後見的支援室らるご 牧野 祥子氏（*）

障がい者後見的支援室
ほどがやゆめあん 山下 道子氏
さぼーと・なみ（南区） 山崎 礼子氏

*の方のお話は、機関紙195号で取り上げていますので、ご覧ください。



自らの経験を語る山下さんと山崎さん(右)



支援室の仲間と対応を相談中
(ほどがやゆめあん)

立つことができるのではない。想像力をフル稼働して登録者とかかわることが大切」と語る。

参加者の声

経験年数の異なるサポーターから、登録者とのエピソードや活動する上で大切にしていることなどを聞き、それぞれの活動を振り返ったサポーターたち。「初心に帰ったり、刺激を受けたり、これでよいのかと悩んでいた今の自分の活動に、光が差した気がする」（働き始めて六年目）、「サポーター活動の中で感じる悩みや戸惑いは、多くのサポーターが経験し乗り越えてきたことを知り、勇気づけられた」（働き始めて二年目）などの声が寄せられた。

横浜市障害者 後見的支援制度

障害のある人が地域で安心して暮らしていくために、平成二十二年に開始した横浜市独自の制度。十八歳以上の障害のある人が居住区の後見的支援室に登録して利用する。段階的に各区に後見的支援室が設置され、平成二十九年に全区での実施となった。

各区の後見的支援室では、責任者、担当職員、あんしんマネジャー、あんしんサポーターが一つのチームとなり、登録者やその家族に寄り添いながら、将来の希望や漠然とした不安などを受け止め、登録者が願う地域での暮らしが実現できる方法を一緒に考えていく。また、登録者の変化などに気づいた時には、必要に応じて、登録者やその家族に確認の上、適切な支援につないでいく。そして、地域の方たちの協力を得ながら、身近なところで登録者をさりげなく見守るあんしんキーパーをはじめとした、地域での登録者を見守る体制づくりに取り組んでいる。

この十月に十二年目を迎え、登録者は千八百名を超えた。

【問い合わせ】

障害者支援センター

☎〇四五六八一二七七

オンラインでの通所者交流会 「クラブハウスすてつぷなな」

都筑区内で高次脳機能障害者の日中活動支援や自立に向けたサポートを行っている「クラブハウスすてつぷなな」では、通所者の交流会を七月に初めてオンラインで開催した。

これまでも通所者ミーティングや交流レクリエーションは定期的に行っていたものの、新型コロナウイルス感染症拡大以降、集合形式での開催が難しくなっていた。

また、外出に不安のある通所者は在宅での活動が中心になっていたこともあり、所内での交流機会が減少していた。

今回、コミュニケーションの活性化やオンライン機器の操作等に慣れていただく事を主な目的に、オンライン形式での交流会開催を試みた。

参加にあたっては通

所者が所有しているモバイル端末などを活用し、必要な設定などについては事前に職員がサポートを行った。個人の端末を利用するの参加が難しい方については、すてつぷななからパソコン等を貸し出す形での参加となった。当日は、操作上のトラブルなども無く、参加を希望していた通所者全員が交流会に参加することが出来た。

「ペースで少しずつ環境にも慣れていった。また、遠方に転居した元通所者にも参加してもらい、オンラインならではの楽しみや繋がりをそれぞれが感じながら交流会は進んだ。ゲームの後は、レクリエーションの内容や旅行先の検討など、今後取り組んでみたいことについて意見交換を行った。各自思い思いの意見を出し合いながら、活発に意見交換が出来たところで今回の交流会は終了した。」

参加した通所者は「リハビリの都合でしばらく会えていない方の参加もあり、変わりない様子を見られたのは嬉しかった。また操作など不安も多かったが、楽しく参加する事ができた。操作にも慣れていき

たいので、ま



オンライン会議活用の様子

た参加したい。」と振り返った

すてつぷなな統括所長の野々垣睦美さんは「災害時等の連絡手段としてはもちろん、平時にも気軽に顔が見える環境は、お互いの安心につながると思う。また、今後も集合することが難しい状況が続く事が想定されるため、プログラムにも変化や工夫が求められてくる。今後は、オンラインで旅先の楽しみを疑似体験できるように、リポート旅行の検討など、今しか出来ないようなアイデアもたくさん取り入れていきたい」と新たな取り組みへの意気込みを語った。

令和3年度 モニター活動に伴う研修会 「コロナ禍におけるモニター活動について」

昨年度、コロナ感染症拡大のため活動中止を余儀なくされていたモニター活動。未だモニター委員がグループホーム（以下、GH）や日中活動場所に直接訪問することが難しい。『コロナ禍でも出来る活動があるのではないか』という委員らの思いから、オンラインを用いた新たな形のモニター活動が提案され、九月二十八日に開催された委員向け研修会で、その方法や活用について話し合った。その中では、コロナ禍におけるモニター活動の重要性を再確認し、今だからこそモニター活動を行って利用者・職員の話を聞きたいといった前向きな意見が多く聞かれた。

オンラインを使ったモニター活動のイメージは、テレビ通話。GHから試験的に進めていく

予定になっている。支援センター職員がタブレット・ポケットWiFiを持ってGHを訪問し、入居者・職員と委員をオンラインでつなぐ。画面越しではあるが、顔を合わせて話すことが出来る。必要に応じてホーム内の様子を映すなど、訪問に近い形をとることも可能だ。現在、モニター訪問を承諾して頂ける訪問先を募集している。本活動に関するお問い合わせは支援センターまで。

※モニター活動とは

「モニター活動」は、第三者であるモニター委員が、障害のある人のGHや日中活動場所を訪問し、その運営や援助内容に、人権尊重の姿勢が導入されているかを見守る活動。モニター委員は、当事者・家族・弁護士・社会福祉士、精神保健福祉士・学生・市民など様々な立場の方で構成されている。

「食品における衛生管理の手法 HACCP勉強会・個別相談会」の開催

食品衛生法の改正に

伴い、食品製造業・飲食
店・販売などを行う事
業所に対しHACCP

(ハサップ・世界で標準
的に活用されている衛
生管理の手法)に基づ
く衛生管理が義務付
けられた。具体的にど
のような管理が必要
か、不安な声も多かつ
たことから、地域活動
支援センター作業所
型・機能強化型障害者
地域活動ホームを対象
に勉強会を開催した。

営業許可の届け出に
よって内容も異なるこ
とから「菓子製造」「パ
ン製造」「喫茶」「弁当
製造」と4回に分け、
講師には巡回相談員で
もあるホシザキ湘南株
式会社のHACCP
コーディネーターをお
招きした。会場とオン
ラインで延べ三十三事
業所、個別相談会には

二事業所が参加した。

HACCP勉強会

HACCPとは「危
害要因分析・重要管理
点」と訳され、原材料の
入荷から製品の出荷に
至るすべての工程の中
で、食中毒などを引き
起こす要因を無くす
ために、衛生管理計画

を立て、きちんと管理
が出来ているか項目ご
とに日々の記録を行い
管理する手法である。
勉強会では、衛生管理
のポイントから衛生管

理計画書の詳細、保健
所のチェック項目など具
体的な内容が話され
た。会場からは、障害
特性によっては衛生管
理の徹底が難しい、日々
の運営に加えて記録の
作成にまで手が回らな
い等の意見があった。

障害者支援センター
では巡回相談事業でH
ACCPについての相談

も対応しており、今回
の講師でもあるホシザ
キ湘南株式会社が事
業所の職員だけではなく
利用者向け衛生講
習も行っている。衛生講
習だけではなく、衛生
診断や事業所の実情に
応じたHACCPの計
画書・記録表のアドバイ
スなども巡回相談で対
応している。

終了後のアンケート
では、「現在行っている
衛生管理で良いのか不
安があったので今回答
え合わせができて安心
した」「計画書のひな型
を提示してもらい本当
に助かった」との感想が
あった。六事業所が今
後巡回相談を利用し
たいと希望があった。

HACCPの二番

重要なこと

講師のホシザキ湘南
株式会社松田さん、樋
口さんに話を聞いた。

「HACCPの考え
方を取り入れた衛生
管理」は一見難しく感

じられるが、今まで行っ
てきた「一般的衛生管理
を土台として、手引書
をもとに衛生管理計
画をつくる事ができ
る。一般的な衛生管理の
中で一番重要なのは「手
洗い」。いかに手洗いを
しっかりと行えるかでリ
スクが抑えられる。手
洗いがなぜ必要なのか、
どんなリスクがあるの
かも巡回相談で話した
ところ、熱心に聞いてく
れ、意識向上につながっ
ているようだ。ぜひ巡
回相談事業を活用し
ていただきたい。

巡回相談のお問い合わせ
は障害者支援セン
ターまで。



勉強会の様子



無限夢工房(西区)
濱崎 修考さん

西区にある「無限夢
工房」に通う濱崎さん
はパソコンが得意だ。コ
ロナ禍で通所が難しく
なる中でも得意のパソ
コンを活かしてテレワ
ークをしている。今は、レ
シートの入力作業や本
のデジタイ化の仕事を行
っている。「自宅で過
ごすことが好き」と話
される濱崎さんにお仕
事以外の楽しみについ
ても伺った。

「趣味はゲーム」とい
う濱崎さん。ゲームは
小学生の時から始めた
そうだ。最近は主にオ
ンラインゲームを楽し
んでいる。オンライン
ゲームをしていると思
わぬ出会いがある。外
国の方とつながり、ス
マートフォンで単語を調
べながら、英語でチャッ
トをすることもある。

YouTubeでゲーム動
画の配信をしている方
とつながり、濱崎さんが
YouTube上に登場
したこともあるとい
う。「偶然の出会いやそ
こから広がる世界が楽
しい」と嬉しそうに話
してくれた。

濱崎さんの趣味の時
間はゲームだけにとど
まらない。何気なく見
始めた動画をきっかけ
に料理や野球、鉄道と
たくさんのお好きなこ
とが増えたそうだ。

これからやってみたい
ことを尋ねたところ「い
つか動画を投稿してみ
たい。ゲーム動画をあ
げてみたい」と笑顔い
っぱいの濱崎さん。濱崎
さんが投稿した動画を見
られる日が今から待
ち遠しい。



パソコンに向かう濱崎さん

よこはま障害者共同受注総合センター 受注センター わーくる通信



災害発生時にも役立つ『その場で作る除菌ウエットタオル』。その商品にセットする袋折作業を障害者施設が受注している。

「した」と話す。また、「ビニール袋を折るだけですが、単調で根気と手先の器用さが必要な作業で、思ったよりも大変だったので、本当に助かっています」とのこと。

製造元の株式会社ボジティヴィストでは、それまで社内に対応していたビニール袋折りについて、販売促進を進めるにあたり外部への依頼を検討し、わーくるへの問合せに繋がった。

わーくるでは相談を受けて、作業単価の提案や事業所の負担減のために資材搬入・納品を担当いただくようお願いして、作業を希望する四か所の事業所を紹介した。

担当の宮澤さんは、実際に依頼した感想を「最初、二つがとても綺麗に仕上がってくることに驚きました。納品されたビニール袋を見れば、皆さんの丁寧な作業の様子がすぐに分かります」



工房アリアーレでの作業風景

工房アリアーレ（旭区）は受注している事業所の一つ。実際に作業を担当する湯浅さんは、「片手に麻痺があり、袋折りは大変だけど、災害時にも役立つ商品と知ってやりがいがある」、職員の高原さんは「メンバーさん達の作業に対する責任感や頑張る姿を見て、我々も気が引き締まります」と話してくれた。

（株）ボジティヴィストでは『その場で作る除菌ウエットタオル』の製品PRとともに障害者施設に協力してもらっていることをアピールし、「ふるさと納税」返礼品に応募。みごとに採用され、受注している事業所の更なる励みとなっている。

九月末に発表となった令和三年度の横浜市「ふるさと納税」返礼品の中には、他にも障害者施設で製造しているお菓子なども採用されています。ぜひ一度、サイトをチェックしてみてください。

【横浜市ふるさと納税返礼品紹介ページ】

<https://www.furusato-tax.jp/city/product/14100>

【わーくる問合せ先】

よこはま障害者共同受注総合センター
電話 045-306-9910
<https://www.yokohama-juchuu.jp>

あゆみ荘

だより

すべての人においしい
楽しいひとときを
横浜あゆみ荘

「レストランあゆみ」

お出かけして大きなお風呂にゆったりつかって、美味しいものを食べたい。こんな時期だからこそ、横浜あゆみ荘で一息つきませんか。

横浜あゆみ荘の自慢は、おもてなしと大きなお風呂、そしてお食事です。旬の食材を活かした御膳料理はもちろんのこと、「やわらか食」が横浜あゆみ荘の自慢です。「やわらか食」は介護食あるいは中期食といわれるお食事ではぐきで潰せる程度の軟食と、ヨーグルト状でとろみをつけたミキサー食をおだししています。

咀嚼や嚥下の状態、アレルギー等を必要により事前にお聞きした上で提供しており、食事の多様性が求められる学校・団体に特に喜ばれています。

また、ランチには、定食や麺類をお出しする気取らない定食屋の二面もございます。

横浜あゆみ荘の食をささえるレストランあゆみの赤木店長が、こだわりを語ります。

「食材の彩りに心を配り、季節を感じていただける料理をおだしたいです。そして、横浜ならではの食材にこだわっております。特にこだわっているのは、横浜特産のはまぼろしです。はまぼろしは本来の旨味や脂の甘みを感じていただけるよう、冬はしゃぶしゃぶ、夏は冷製等でおだしています。「はまぼろし御膳」は、夕食の定番メニューになっています。また、ランチも日替わり定食を始め、季節ごとのメニューを取り入れています。

昼の定食の一例



横浜あゆみ荘年末年始休館及び施設点検による臨時休館のお知らせ
【年末年始休館】

令和三年十二月二十八日から令和四年一月三日まで

【施設点検による臨時休館】

令和四年一月二十日から一月二十八日まで

お問合わせは、

横浜あゆみ荘まで

☎045(941)8383